

## [普及事項]

成果情報名：秋冬ネギにおけるネギ葉枯病の黄色斑紋病斑に対する防除体系  
—低感受性品種の利用による薬剤防除回数の削減と高品質なネギの確保—

研究機関名 農業試験場 生産環境部 病害虫担当  
担当者 齋藤隆明・渡辺恭平・他1名

## [要約]

秋冬ネギにおいて、ネギ葉枯病の黄色斑紋病斑に対する感受性が低い品種「項羽一本太」を利用することで、繁忙期である9月下旬の薬剤防除を削減し、9月上旬・中旬、10月上旬の3回の防除で高い品質のネギを確保することができる。

## [キーワード]

秋冬ネギ・ネギ葉枯病・黄色斑紋病斑・項羽一本太・薬剤防除

## [普及対象範囲]

県内全域

## [ねらい]

秋田県の秋冬ネギにおいて、ネギ葉枯病に対する薬剤防除を9月上旬～10月上旬に約10日間隔で行うことにより、品質に大きく影響する本病の黄色斑紋病斑による被害を低減できる（平成28年度実用化できる試験研究成果）。一方で、この時期には稲刈り作業等の農作業量が多くなるため、本病に対して省力的な防除技術が現場から求められている。

そこで、ネギ葉枯病の黄色斑紋病斑に対する感受性が低い品種を利用した防除体系を検討する。

## [成果の内容及び特徴]

- 1 ネギ葉枯病の黄色斑紋病斑に対する感受性が低い品種「項羽一本太」を使用した場合、9月上旬・中旬、10月上旬に薬剤防除を3回行う体系（以下、3回）と9月上旬～10月上旬に4回行う体系（以下、4回）は同等の良品率であった。また、感受性が高い品種「夏扇パワー」における良品率は、3回が4回よりも低かった（表1、図1）。
- 2 「項羽一本太」を供試した現地試験では、3回と4回で同等の良品率を確保できた（表1、図2）。

## [成果の活用上の留意点]

- 1 良品率は黄色斑紋病斑の発病程度が低く、出荷可能な株の割合を表す。
- 2 各試験ほ場の播種日・定植日は、農業試験場内ほ場：2022年4月15日・5月30日、現地ほ場：2022年2月24日・5月26日、2023年：4月8日・6月1日であり、収穫時期は10月下旬である。
- 3 葉枯病の黄色斑紋病斑に対する感受性が低い品種は「項羽一本太」と「関羽一本太」である（令和4年度実用化できる試験研究成果）。また、秋冬ネギではネギさび病も考慮する必要があり、本病に対する感受性は「項羽一本太」の方が低いため、本品種を供試した。
- 4 本防除体系では、ネギさび病に対しても有効な薬剤を選定し、同時防除ができる。

[具体的なデータ等]

表 1 各試験における薬剤防除体系の概要

試験年次	試験場所	供試品種 <sup>1)</sup>	防除回数 <sup>2)</sup>	薬剤防除 <sup>3)</sup>			
				9月上旬	9月中旬	9月下旬	10月上旬
2022年 2023年	農業試験場内 現地	「項羽一本太」 (慣行)「夏扇パワー」	3回	カナメ フロアブル	テーク 水和剤	—	アミスター20 フロアブル
			4回 (対照)	カナメ フロアブル	テーク 水和剤	ダコニール 1000	アミスター20 フロアブル
			0回 (無処理)	—	—	—	—

- 1) 農業試験場内ほ場は「項羽一本太」と「夏扇パワー」、現地ほ場では「項羽一本太」を供試した。  
 2) 現地ほ場では、0回(無処理)を設けていない。  
 3) 薬剤はネギ葉枯病の登録内容に準じ、展着剤ネオエステリン5,000倍を加用して200L/10a相当量を散布。

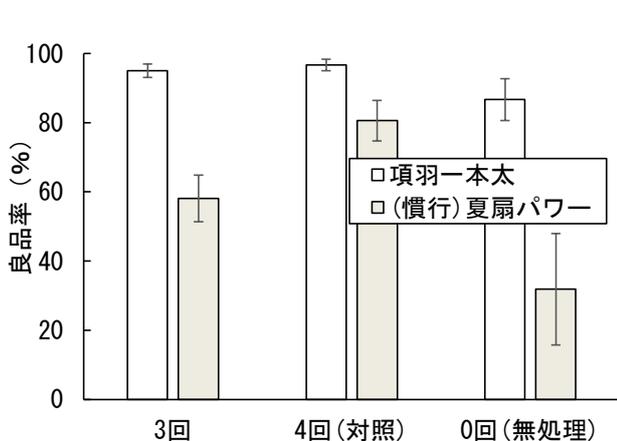


図 1 各品種における薬剤防除回数異なる場合の良品率 (2022年)

- ※1 試験場所：農業試験場内ほ場  
 ※2 調査日：2022年10月20日  
 ※2 エラーバーは標準偏差を示す。

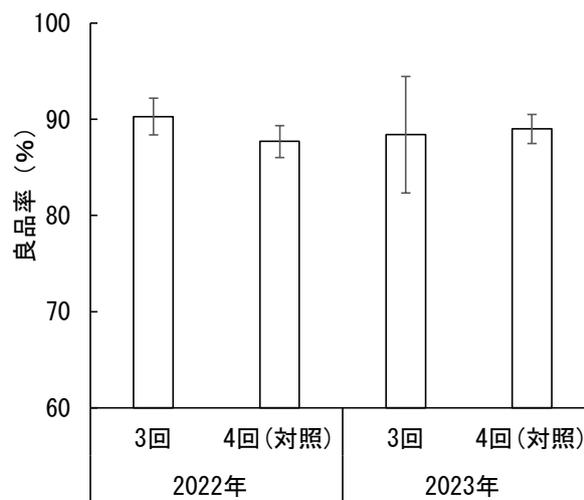


図 2 「項羽一本太」における薬剤防除回数異なる場合の良品率 (2022年、2023年)

- ※1 試験場所：現地ほ場  
 ※2 調査日 2022年：10月21日  
 2023年：10月25日  
 ※3 エラーバーは標準偏差を示す。

[その他]

研究課題名：秋冬ネギにおける耐病性品種を用いたネギ葉枯病に対する農薬散布体系の確立  
 研究期間：令和4年度～令和5年度  
 予算区分：配当(植物防疫・農薬安全対策費(水田総合利用課))  
 掲載誌等：なし